日本心理学会第６７回大会 WS（2003 年９月 15 日 東京大学）

『　宗教心理学的研究の展開ーその歴史と現状ー　』

【 発表 1】

日本における宗教心理学の歴史と現状

発表者　杉山幸子

１．はじめに

現在、日本の心理学において「宗教心理学」という言葉を耳にすることは多くない。しかし、宗教は文化的な差異の大きい社会的事象であると同時に、きわめて主観的な個人的体験でもあり、心理学、社会心理学にとって興味深い研究対象であるのは間違いない。そして、宗教研究が心理学において盛んになるためには、宗教心理学（あるいは宗教社会心理学）というカテゴリーが広く認知される必要がある。そうでないと、個々の研究成果がばらばらに存在するだけで、研究の積み重ねが困難であり、そのことは宗教に関心のある研究者が後に続くのを阻害してしまうからである。

この発表では、宗教心理学という分野の基礎を固めることを狙いとして、過去の日本の心理学において宗教研究がどうあったのか、また、現在はどのような状況なのかを述べてみたい。

２．明治・大正期

欧米における宗教心理学は、19 世紀末から 20 世紀初頭の約 30 年間にアメリカで花開いた。有名な研究者としては、ホール、ジェイムズ、スターバックらがあげられる。この同じ時期に日本でも宗教心理学がスタートしたのだが、この頃の論文や著作には「宗教心理学」というタームが頻繁に認められること、主要雑誌である『心理研究』に論文が発表されていたこと、東京帝国大学の心理学研究室から少なからぬ研究が生み出されたことなどから、当時の心理学界では「宗教心理学」という分野が認知を得ていたものと思われる。研究には（ヴントの民族心理学の流れを汲む研究者もいたが)、全体的にアメリカの宗教心理学の強い影響が認められる。

３．昭和初期

大正期の宗教心理学が質的にかなりまとまりのあるものだったのに対して、戦前の研究については、いくつか重要なものは認められるものの、散発的との印象を免れない。おそらく、アメリカの初期宗教心理学が衰退するのに従って、日本でも勢いを失ってしまったのではないかと思われる。その中で特筆されるのが今田（1934,1947）の『宗教心理学』であり、これはそれまでの日本の宗教心理学の集大成といえる。それに対して、松宮（1933）の「基督教に対する態度の研究」は明確に社会心理学の立場から行われた最初の宗教研究であり、これは今後の研究の方向性を示すとともに、宗教心理学というアイデンティティの喪失を示唆している。

４．戦後～現在

戦後から現在に至る研究の流れは、青年心理学、人格心理学、社会心理学の３つに大まかにまとめられる（その他に、瞑想に関する独自の発展を遂げた研究群がある)。青年心理学的研究は青年の宗教意識の特性を明らかにし

ようとするもので、宗教性そのものに強い関心が寄せられているのが特徴であり、従来の宗教心理学を受け継ぐものといえる。数は少ないが、最近は比較文化的研究への発展も見られる。この領域は宗教学分野での研究との接点も大きいが、現在のところ、交流はあまり見られない。

人格心理学的研究では、宗教とパーソナリティに関する独自の論考も見られるが、実証的な研究としては、宗教者にパーソナリティ・テストを実施し、宗教的行動や信念とパーソナリティ特性との関わりを調べたものがほとんどである。こうした研究では宗教性そのものへの関心が伺われることは少なく、そのせいか、個々の研究成果は興味深いものであっても、その後の研究への発展性が見受けられない。

社会心理学的研究においては、松宮以来の宗教的態度の研究が最も大きな流れであり、50 年代から 70 年代にかけて、主にキリスト教を対象として行われた。最近は特定の宗派ではなく、日本人に広く認められる宗教性（民俗宗教性）に注目した研究が行われている。このタイプの研究は宗教を独立変数として扱う研究へと応用することができるため、社会心理学のパラダイムにおいても可能性が大きい。ただ、これまでは個々の研究者が独自の質問紙を作成するに留まっており、なかなか研究が蓄積されないのが現状である。社会心理学的研究にはこの他に、初期宗教心理学以来の伝統的なテーマである回心（入信、宗教的社会化）や、近年注目を集めたマインド・コントロールに関する研究も位置づけられる。

一方、かつての宗教心理学において中心的なテーマのひとつでありながら、現在はほとんど行われていないのが発達心理学的研究、特に子どもの宗教性に関する研究である（年齢を独立変数にした質問紙法による研究は若干見られる）。この研究では宗教性への深い関心と、観察や面接による質的研究が不可欠であり、今後の発展が期待される領域である。

【 発表 2 】

宗教的自然観に関する心理学的研究－あらたな宗教性指標の模索－

発表者　西脇　良

宗教文化の重要性　宗教心理の実証的研究をすすめる際，対象となる個人や集団がそこにおいて生活を営んでいるところの,宗教文化（宗教にかかわっての公の意味や慣習）の問題を看過することはできない.或る宗教文化において妥当している宗教意識･行動のあり方が，別の宗教文化にも適用できる指標であるとは限らない.対象となる人々の宗教文化に最もよく適合する宗教性指標を発見し，その指標を用いて調査を行うことが,当該文化のもとで生活する人々の宗教性を，より一層明らかにしてゆくことにつながる.

とすれば，欧米の宗教文化を踏まえつつ提唱された理論や尺度を，日本人を対象とする研究に適用しようとする際には，当然注意が必要になってくる．たとえば，宗教性に関する普遍的な生涯発達理論として提唱され，その実証的研究も多い Fowler(1981)の信仰発達理論を例にとると，この理論における鍵概念である“信仰”概念にも，その発達段階論にも，キリスト教バイアスの存在が指摘されている(Broughton, 1986 ; Nelson, 1992 ; 西脇, 2001)．ということは，いかによく知られている Fowler 理論であっても，キリスト教文化圏ではない日本へそのままのかたちでは適用できない，ということになる．或いはまた，主として英語圏で用いられる宗教性測定尺度は，日本で用いられる宗教意識調査の項目群に比べて，単語“神，悪魔，天使，祈り，瞑想，奇跡”などの使用頻度が高く，逆に“霊魂，救い，自然(ないし自然に関連した単語)”の使用頻度が低い，という分析結果もある(西脇, 2003a)．そればかりか，分析対象となった宗教性測定尺度集（Hill & Hood［Eds.］, 1999）に取りあげられた 112 の尺度のなかで，“イエス･キリスト”の語を使用する尺度は全体の 41%，“聖書”の語を使用する尺度は全体の 47%，にのぼっていた．測定尺度で用いられる単語の使用頻度をとりあげて考えてみても，そこには，調査が実施されるところの当該宗教文化の影響というものを抜きにして考えることはできない.

このように考えてくると，欧米における実証的宗教心理研究が，その研究成果を着実に蓄積させていることを認めつつも,しかしそれらをそのまま日本に採り入れることは，宗教文化の観点からみて困難であるといわざるをえない.日本の宗教心理研究が，日本の宗教文化のなかで生活する人々 ――特定の宗教教団に加入している場合であれ,そうでない場合であれ―― を調査対象とする限りは，その人々の意識･行動と深く関わっている，日本の宗教文化への視点を無視できないのである.

新たな問いの必要性　さてしかしながら，そうはいっても，日本の宗教文化の特徴ほど，実証的に捉えにくいものはないように思われる.社会調査などをみる限り，人々の宗教意識･行動に関して際だって示されてくるのは,信仰の有無を尋ねた場合の“宗教あり”回答の少なさや，慣習的な宗教行動をのぞく自己修養的行動の低さ,或いは，いわゆる回答時の“中間的態度”(林, 1996)に示される曖昧な意識，であろう.これらの宗教意識･行動の“低調ぶり”(“低さと曖昧さ”)は，国際比較調査の結果によってもますます露わにされてゆく（注１）.

こうした社会調査結果によって描かれる日本の宗教文化を，どのように受けとめればよいであろうか.そしてまた，どのような研究展望をみいだしてゆけばよいであろうか. 1つには,調査結果をそのまま受けとめていく道があるだろう．そこでは，“この点では低いがこの点では高い”という記述法によって宗教文化の詳細部分が示されてゆく，ということになるであろう．典型的には，電通総研･余暇開発センター(編，1999)や石井(1997)にその例をみることができよう.

人々の宗教意識･行動を多元的かつ詳細に記述してゆく方法は，今後も有効であるし必要である．しかし一方で，この機会に，次のように根本的な問い直しをしてみることも大切である．すなわち，どちらかというと意識･行動の低調ぶりが強調される，これまでの調査の訊ねかたは，はたして日本の宗教文化の基底にふれていたのだろうか？という問いである．宗教意識･行動の低さや曖昧さのみが際だった結果としてあらわれてくるような問いかたでは，宗教文化の基底にふれたとはいえないのではないだろうか．日本の宗教文化のもとで生活する人々の宗教意識･行動を十分に描き出すためには，調査における問いが，宗教文化の基底に十分にふれているものでければならない．問題の所在は，あくまでも，質問項目を立てる側にある.

宗教的自然観への注目　こうした視点にたって筆者が取り組もうとしている研究テーマが，宗教的自然観の問題である．研究をすすめるうえでの作業仮説は，以下の 3 点である：(a) 日本の宗教文化の基底には，宗教的自然観がある；(b) したがって，人々の宗教意識･行動を実証的に捉えようとする際，人々のもつ宗教的自然観が十分に表出されるような問いの立て方が必要であり，かつ有効である；(c) 宗教的自然観は，日本の宗教文化ばかりでなく，どの宗教文化圏においても重要な文化の基底である．したがって，宗教心理の普遍法則を記述していくための有効な手段･研究主題となりうる．以上の見通しのもと，研究は開始された.

宗教的自然観が日本人の宗教心理の探求にあたって重要な論点であることは,すでに実証データを伴った指摘が幾つかなされているし（たとえば，林文 他,1994；林･川崎, 1981；金児, 1997；西沢, 1998；西脇, 2000；野村, 1960；やまだ,1988；山縣，1999），心理学以外の領域，とりわけ宗教学の領域を見渡してみれば,枚挙にいとまがない．加えて筆者が注目するのは，宗教的情操論にかかわっての,小中学校・学習指導要領（たとえば，文部省, 1989, 1999a, 1999b, 1999c）“第 3 章道徳”における自然の扱われ方である．指導要領においては，具体的な自然体験や,自然と人間との関係を学ぶなかで，宗教的情操(“人間の力を超えたものに対する畏敬の念”)が涵養されてゆくことの期待が表明されている.公立学校における宗教的情操教育の理念型のなかに宗教的自然観がさりげなく組み込まれてゆくところにも,日本の宗教文化における宗教的自然観の重要性をみてとることができよう.

ただ残念ながら，まだ日本においては，宗教的自然観という観点に的を絞った実証研究は,管見ではみあたらない．実証研究が存在しないということは，具体的な調査研究をすすめてゆくうえでの心理学的概念としての宗教的自然観がまだ構成されていない,ということを意味する．仮説検証を反復してゆくだけの十分なデータ，および議論についても,然りである.

調査の概要　このような制約のなかで，宗教的自然観に関する，端緒的かつ包括的な調査研究が実施された（西脇, 2003b）．まず宗教的自然観を，“自然との接触によって生ずる，宗教的価値対象に対する認識･感情と，自己に対する認識･感情との総体”，と規定した．そして，宗教的自然観の概念内容として，宗教的価値対象については,(a)何ら

かの実在（神 仏，霊魂など）；(b)価値として表現されるもの（大いなるもの，偉大なもの，人間の力を超えたもの，生命，永遠，無限など）を想定した．自己に対する認識・感情については，(c)自己の存在の在り方についての認識（有限性，無力さ，生きている喜び，自然に癒される自己）；(d)宗教的感情（畏敬，神秘感，感謝，謙虚，懺悔）を想定した．構成概念の特徴としては，自然に対する見方だけではなく，自然体験を通しての自己認識の側面をも，宗教的自然観の概念のなかに含み入れた点，が挙げられる．

次に，3 県下の宗教系（カトリック系）中学高等学校 5 校に通う生徒 2000 余名 （注２ ） に対する，自由記述式調査が実施された．“これまでの生活をふり返って，ふかく感動した，身近な自然体験を 1 つ思い出してください”と教示し，想起された自然体験について，その時期・場所・同伴者・体験内容を訊ねたほか，体験を通して気づいたこと，感じたことを自由に記述するよう求めた．

回答者の記述は，分類 3 層からなる合計 124 のコードによって分類された．このうち，宗教的自然観に該当するコード数は 28 であった．今回の調査では，宗教的自然観の記述を促すような状況を意図的に設定していないため，該当する記述の出現率は全体の 0.1%－4.4%にとどまった．

“小ささ・無力さ” 宗教的自然観として分類された自由記述は 28 種類にのぼる．そこで，ここでは,28 コード中もっとも記述頻度の高かった“自己の存在の小ささ・無力さ” について,簡潔に報告したい．

“自己の存在の小ささ・無力さ” とは，自然体験を通して気づかれる自己存在の在り方に対する認識（自己認識）の 1 つであり,具体的には，“自分が小さいと思った”，“ちっぽけな存在だなと感じた”，“自分の存在の小ささを感じた”,“人間の無力さを感じた”，などの記述である．記述の事例を Table 1 に示した．

Table 1
自然体験における“小ささ・無力さ”の記述例

事例1．	回答者属性	①中1 ②12歳 ③女子 ④Ｄ校
	体験データ	①山を見た ②保育園/幼稚園通園時 ③[固有地名] ④家族
	該当記述(部分)	山を見ていたら何となく自分は小さいなと思った．
事例2．	回答者属性	①中1 ②12歳 ③男子 ④Ａ校
	体験データ	①滝を見た ②中学(1年) ③夏の川の滝 ④友達
	該当記述(部分)	こんな大きな水と森に比べると人はちっぽけだと思った．
事例3．	回答者属性	①中3 ②15歳 ③女子 ④Ｄ校
	体験データ	①星を見た ②保育/幼稚園通園時 ③スキーをしに行って,夜に宿からでて散歩していたとき ④家族(父,母)
	該当記述(部分)	自分は小さいんだと初めて思ったことは覚えています．
事例4．	回答者属性	①中3 ②14歳 ③男子 ④Ｃ校
	体験データ	①空を見た ②小学高学年 ③家の庭 ④ひとり
	該当記述(全文)	その日は旅行から帰ってきた日の夕方で,家に入る前にふっと空を見上げたら,夕日に輝いていた雲が,まるでとてつもなく大きな山に見えたのです.そのとき僕は,自分はなんて小さいのだろうと大きなショックをうけました．
事例5．	回答者属性	①高2 ②17歳 ③女子 ④Ｂ校
	体験データ	①月を見た ②小学高学年 ③道を歩いていたとき ④ひとり
	該当記述(部分)	そして,自分は自然の中ではこんなに小さいものなんだということに気がつきました．
事例6．	回答者属性	①高2 ②17歳 ③男子 ④Ｃ高
	体験データ	①流星を見た ②高校(1年) ③家の庭 ④ひとり
	該当記述(全文)	しし座りゅうせいぐんで,生まれて初めて流れ星を見たこと.とても寒かった.とても眠かった.でもなんとなくうれしかった.空って広いなぁ.雲ってでかいなぁ.その下に立つオレってちっちゃいなぁー．

回答者属性: ①学年 ②年齢 ③性別 ④在籍校
体験データ: ①体験内容 ②体験時期 ③体験場所(状況) ④同伴者(の有無)

この種の自己認識は，宗教学分野において“被造者感情”（オットー，1917 山谷省吾訳,1968）として知られてきた

自己認識に相当するもの，と考えられる．その記述頻度にジェンダー差はみられないが,高学年により多くみられる記述である（高 2 群＞中 1 群）ことから，青年期における宗教性発達の 1 指標となりうる,と考えられた．この事例が示すように，自然体験は，神仏霊魂観念に代表されるような宗教意識とはまた別の種類の宗教性をも活性化させる,と考えられる．

今後の課題　今回の調査は，日本の宗教文化により適合した宗教性指標の模索，という観点から行われた，端緒的・包括的調査である（なお，現在もデータを増やして分析中である）．調査対象も，それほど大きな歪みとは考えられないものの，全国調査のような代表性が保証されているわけでもない．今後，サンプリングの問題を解決することに加え，このような自由記述となって表出されてくる宗教的自然観が，どのようなプロセスを経て形成されていくのか，宗教性発達の視点から探求してゆくことが課題となろう．

【注】

1. 社会調査としての宗教意識調査の包括的レビューについては，石井(1997)を参照.またその後，西脇(2003b)も，国内調査および国際比較調査（主として 1990 年代以降の調査）の包括的レビューを試みて,日本人の宗教意識･行動について次のような特徴を挙げている．すなわち，国際比較調査のレビューから,(a) 先祖への尊敬の念，易･占い，呪い･祟りなどの観念，“宗教的な心の大切さ”については各国と比較して意識が高いが，その他は全般的に低い；(b) お守り･お札･おみくじ･占いといった呪術的行動については各国と比較して行動率が高いが,その他は全般的に低い；(c) 高年齢層同士の比較では，宗教の有無，宗教活動への参加,で低い；(d)家庭における宗教教育はほとんど重視されていない，などの点を指摘している.また，国内調査のレビューから，(a) 宗教･信仰の有無，宗教的関心の有無などでは 10－30%台の肯定率にとどまっている；(b) 成立宗教に対する態度では，否定的イメージの方がやや高いが，それは宗教の“非合理性” に対する拒否ではなく，“金儲け主義，強引な勧誘” への拒否である；(c) 神仏霊魂観念については 30－40%台の肯定率であるが，実在観念よりもより広い観念（超自然的力,運命，応報）については 60－70%台と高くなる；(d) 墓参，初詣，祭り，神棚仏壇への参拝などの行動については,50－70%台と高いが，自己修養的行動（宗教的読書，精神統一，勤行･布教など）は 10%台/未満と低い.現世利益的行動（お札･お守りの携帯，神社祈願）は 20－30%でありそれほど高くない,などの点を指摘している．そしてこれらのレビューをまとめて，日本人の宗教意識･行動は“極端なものの拒否,そうでないものへの寛大さ”として特徴づけられる，とした．

2. 今回の調査では，事情により，調査対象校をカトリック学校に限定せざるを得なかった．したがって，サンプリングから生じる歪みは避けられない．一方，(a) 今回の調査では，少なくともカトリック学校のみに対象校を絞りこんでおり，宗教系学校としての統一性は確保されている；(b) 自らの宗教を“キリスト教”と回答した者は全体の 15%未満である；(c) カトリック学校における宗教教育の現状を考えると(たとえば，カトリック中央協議会学校教育委員会［編］, 1989)，カトリック学校の宗教教育そのものが，回答者の宗教的自然観に対して直接的に与える影響はそれほど大きくはないと考えられる，の 3 点を補足しておく．

【 引用文献 】

Broughton, J.M.　1986　The political psychology of faith development theory.　In　C. Dykstra, &S. D. Parks (Eds.),　Fatih development and Fowler.　Birmingham, Alabama：Religious Education Press. Pp. 90-114.

カトリック中央協議会学校教育委員会（編）　1989　カトリック学校教育実態調査　カトリック中央協議会（未公刊資料）

電通総研･余暇開発センター(編)　1999　世界 23 ケ国価値観データブック　同友館

Fowler, J.W.　1981　Stages of faith.　New York：Harper Collins (1995 pbk. edition).

林文･林知己夫･菅原聡･宮崎正康･山岡和枝･花房英光　1994　日本人の自然観についての予備的考察　INSS JOURNAL（原子力安全システム研究所）, 1, 159-175.

林知己夫　1996　日本らしさの構造　東洋経済新報社

林信男･川崎正明　1981　青少年の宗教意識調査　キリスト教主義教育, 9, 157-193.
Hill, P.C., & Hood, Jr. R.W. （Eds.） 1999 Measures of religiosity. Birmingham, Alabama : Religious Education Press.
石井研士　1997　データブック現代日本人の宗教　新曜社
金児暁嗣　1997　日本人の宗教性　新曜社
文部省（現･文部科学省）　1989　小学校学習指導要領, 中学校学習指導要領
文部省（現･文部科学省）　1999a　小学校学習指導要領, 中学校学習指導要領
文部省（現･文部科学省）　1999b　中学校学習指導要領（平成 10 年 12 月）解説―道徳編―
文部省（現･文部科学省）　1999c　小学校学習指導要領解説（道徳編）
Nelson, C.E.　1992　Does faith develop?　In　J. Astley, & L. Francis (Eds.),　Christian perspectives on faith development. Leominster : Eerdmans.　Pp. 62-76.
西脇良　2000　自然観についての予備的研究　日本教育心理学会第 42 回総会発表論文集, 317.
西脇良　2001　ファウラーの信仰論について　白百合女子大学キリスト教文化研究論集, 2, 77-102.
西脇良　2003a　宗教性測定尺度の文化間比較　白百合女子大学キリスト教文化研究論集, 4, 92-142.
西脇良　2003b　現代の宗教的自然観に関する実証的研究　白百合女子大学大学院文学研究科博士論文（未公刊）
西沢悟　1998　宗教心理と精神健康　北海学園大学学院論集, 96･97, 1-65.
野村暢清　1960　キリスト教, 神道に於ける, 事物把握（知覚意味づけの様式）の特徴に関する研究　九州大学文学部哲学年報, 22, 179-224.
オットー R.　山谷省吾(訳)　1968　聖なるもの　岩波書店（原著刊行年次, 1917 年）
やまだようこ　1988　私をつつむ母なるもの　有斐閣
山縣喜代　1999　現代日本女性の生き方　ミネルヴァ書房

【 発表 3 】

あるプロテスタント(ホーリネス系)教会における日本人クリスチャンの宗教性発達過程モデルの構成

松島公望

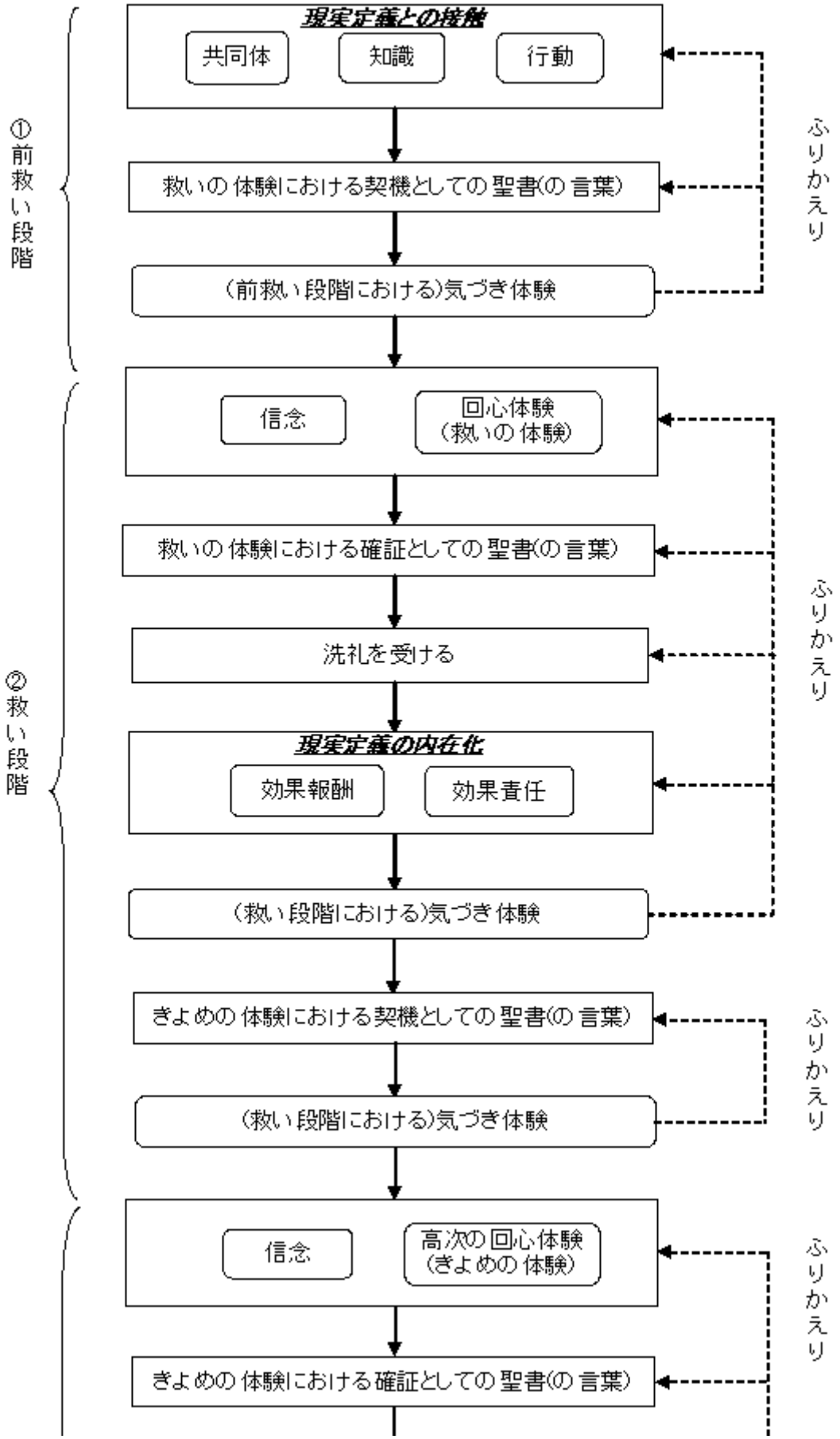
１．研究の概要

あるプロテスタント（ホーリネス系）教会における日本人クリスチャンの宗教性発達を検討するために、以下の手順で研究を行い、モデル構成を行った。

まず Glock(1962), Glock & Stark(1965) と 杉山(1993) の宗教性 と作道(1983, 1984a, 1986a, b) の宗教的社会化に基づき, 「宗教性発達過程モデル」を構成した。

続いて、あるプロテスタント（ホーリネス系）教会における日本人クリスチャン（７人のＺ神学校神学生）を対象として面接調査を行った。面接調査は、縦断的に 1999 年 5 月～2001 年 5 月にわたり 5 回実施した。面接については、杉村（1998）を参考にし、得られたデータを逐語録にし、個人分析表を作成し、各エピソードごとに宗教性との関連を検討した。さらに、その個人分析表をカードに分類し、時系列的に整理して、各事例の個人史を作成した。

さらに、作成した個人史を基に、個々（７事例）の宗教性発達過程修正モデルを構成した。次にそれら個々の宗教性発達過程修正モデルに共通する部分を整理し、あるプロテスタント（ホーリネス系）教会における日本人クリスチャンの宗教性発達過程モデルを構成した（Figure 1 参照 ）。


現実定義との接触
共同体
知識
行動
救いの体験における契機としての聖書(の言葉)
(前救い段階における)気づき体験
信念
回心体験
(救いの体験)
救いの体験における確証としての聖書(の言葉)
洗礼を受ける
現実定義の内在化
効果報酬
効果責任
(救い段階における)気づき体験
きよめの体験における契機としての聖書(の言葉)
(救い段階における)気づき体験
信念
高次の回心体験
(きよめの体験)
きよめの体験における確証としての聖書(の言葉)
①前救い段階
②救い段階
ふりかえり
ふりかえり
ふりかえり
ふりかえり

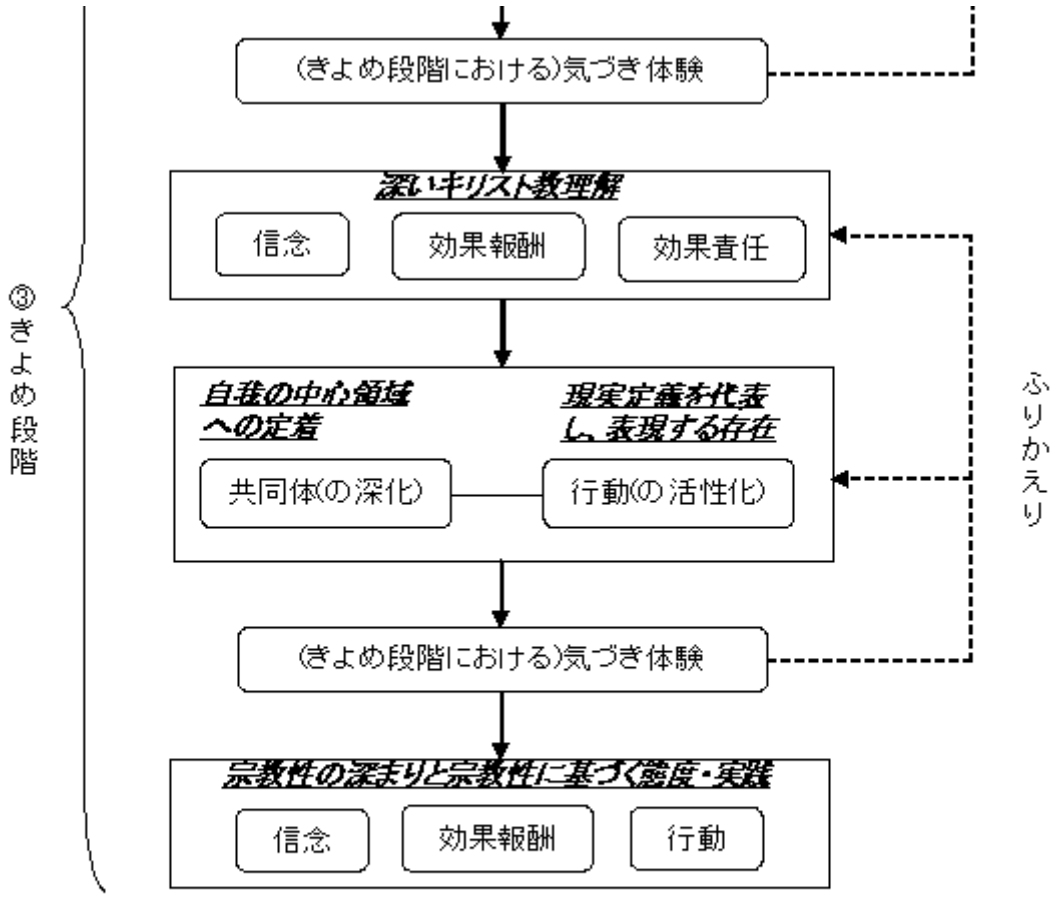


Figure 1　成人クリスチャンにおける宗教性発達過程モデルの構成

モデルによって検討した日本人クリスチャンの宗教性発達は以下の通りである。宗教的人格の成熟は、必ずしも生活年齢とは比例しないため（松本,1973)、発達段階と対応しない側面もある。欧米やクリスチャン家庭であれば、乳児期～老年期と対応できるが、日本ではそのようなケースはまれである。よって、今回の研究では、ホーリネス系教会の宗教体験の段階に基づいて、段階を設定し、宗教性の発達の流れを捉える。

① 前救い段階　　まずクリスチャンの友人と接したり（共同体)、聖書を読んだりすることによって（知識, 行動)、キリスト教の現実定義との接触が始まる。接触の頻度が高まっていく中で、「救いの体験における契機としての聖書の言葉」が与えられ、真剣に神を求めるようになる（気づき体験)。

② 救い段階　　真剣に神を求めたり、日常生活の中で神の業であると感じる中で（気づき体験)、回心体験（救いの体験）をする。救いの体験の後に、自分の救いの体験が主観的な体験ではなく神によって受けたことを確証する聖書の言葉が与えられる。救いの体験の後、洗礼を受け、クリスチャンの一員として、キリスト教の現実定義が内在化していく。神によって救われた喜び（報酬効果）や教会での奉仕や献金（責任効果）など、クリスチャンとしての歩みを体現していく。内在化していく中で、「気づき体験」が深まり、さらに高次の回心体験（きよめの体験）を求めていく。その中で、救いの体験と同様に「きよめの体験における契機としての聖書の言葉」が与えられ、さらに「気づき体験」が深まっていく。

③ きよめ段階　　さらに「気づき体験」が深まっていく中で、高次の回心体験（きよめの体験）をする。きよめの体験の後も、自分の救いの体験が主観的な体験ではなく神によって受けたことを確証する聖書の言葉が与えられる。きよめの体験をしたことによって、「気づき体験」が深まっていき、キリスト教理解が深化し、それに基づいた実践

へとつながっていく。キリスト教理解の深化によって、キリスト教の現実定義を代表し、表現する存在になる。また、キリスト教の現実定義が、自我の中心領域へ定着する。「気づき体験」の深まりの中、宗教性が深まり、宗教性に基づく態度・実践を行っていく。

２．本研究における考察

面接調査による宗教性発達過程モデルの構成にあたって、まずその構成の前提となる Glock(1962), Glock & Stark(1965)の宗教性の概念について検討した。それは、クリスチャンを対象とした研究から生み出された概念であり、これを基にしたものを含む幾つかの数量的調査で因子分析を通して抽出した結果等から、人間における宗教性次元の存在や諸次元の相互関連性などが確認されている（Hill&Hood, 1999）。また日本においても、杉山（1993）が質問紙調査からほぼ同じ結果を得ていたり、Scobie（1975）や金児（1997）もその妥当性について肯定的に論じていることから、日本人クリスチャンに Glock らの宗教性の概念を適用することに問題はないと判断した。しかし宗教性の概念は、人間の内にある宗教性の構造を示唆したものであり、発達的な視点から見るものではなかった。そのため宗教的社会化やアイデンティティ形成という発達的視点も踏まえて事例研究を行った作道（1983,1984a, 1984b, 1986a, 1986b）の研究を緩用した。作道の研究は、宗教面のアイデンティティの形成について分析するなど、事例研究の長所を活かしていて、重要であり、教えられることも大きい研究である（宮下,1995）。これらのことからモデル構成の前提となる宗教的社会化の概念は妥当性のあるものと判断することができるのではないかと考えた。

次に、モデル構成の構成過程について検討する。まずは、作道の宗教的社会化に基づく宗教性発達過程モデルを構成し、その過程に宗教性各次元を適用していく方略に従った。適用の仕方については、先行研究に記述された内容に照らし合わせ、さらに自らの経験も踏まえて行った。この分析を基に、７人の事例の個人史の分析から宗教性発達過程モデルの修正を行った。修正にあたっては位置づけや分析の仕方などできる限りの客観性や適合性などを念頭においた。また、事例の７人に、直接、個人史に誤りがないかの事実確認をしたり、関連領域の研究者と議論することによって、その妥当性を高めることに務めた。最終的に、個々の宗教性発達過程モデルから日本人クリスチャンの宗教性発達の共通する内容、局面を抽出して、宗教性発達過程モデルを構成したのである。

宗教性の発達を捉えるためには、個々の観点や膨大なデータを総合的にまとめる「ものの見方」を提示するモデルが必要である（山田,1986；やまだ, 1995）。その出発点としてモデル構成をしたのである。モデルとは、「関連ある現象を包括的にまとめ、そこに１つのまとまったイメージを与えるようなシステム」（印東,1973）と定義される。本研究においても、宗教性に関する関連ある現象を発達的な側面から包括的にまとめ、そこに改めて１つのまとまった宗教性というイメージを与えるシステムを構成することができた。

本研究では、モデル構成を通して、様々な「ものの見方」を提示した。今後、さらにモデルを検討し、数量的研究から見出される宗教性とは異なる概念を見いだしていきたいと考えている。